

ひと

ドキュメンタリー映画になった聾者の店長

おお た たつろう
太田 辰郎 さん(49)



目が合うまでじっと待つ。パチツと合ったら、笑顔で店の奥から手招きする。差し出すのはコーヒ―と「ごゆっくりどうぞ」の手書きの文字。傍らには「私は耳が不自由です」と書かれたプレートと、紙と鉛筆が置いてある。

静岡県湖西市でサーフショップとハワイアン雑貨の店を開いて5年目になる。生まれつき耳が聞こえない。客が聴者なら筆談や口話で、聾者とは手話で、他国の人は身ぶりで話す。静かなのに見た目はにぎやか。そんな日常がドキュメンタリー映画「珈琲とエンピツ」になり、各地のミニシアターなどで上映されている。自身も聾者の映像作家、今村彩子さん(32)が2年通って撮影した。

「なぜ、聴者と楽しく話せるの？」。その答えを知りたいという今村さんの申し出を受けた。

高校時代からサーフショップの雰囲気憧れ、ボード製作を志した。100人以上の職人を訪ねたが、返事は「聞こえない人に教える自信がない」。教えてもいいという人に巡り合えたのは40歳の時。20年勤めた自動車メーカーを辞め、「師匠」の元に2年間住み込んだ。口の動きと指先を見つめ、技術を覚えた。

今も現役のサーファー。大会で結果を出せなかったプロサーファーには、無言で寄り添う。「伝える方法は何でもいい。大切なのは、伝えたいと思う気持ちだか

文・写真 寺尾佳恵